

## コラム 西洋古代史の泉 6

## ウィーンのローマ帝国

南川高志

オーストリアの首都ウィーン市は、歴史上ハプスブルク帝国の都として有名であるが、古代のローマ帝国との関係もあちこちで感じることができる。といっても、このコラムでこれまで紹介してきたようなオータンやマインツなどのように、劇場や円形闘技場などの大きな遺跡が市中に残っているわけではない。そのような遺跡は、ウィーンから東へ列車で1時間ほどのところにあるカルヌントゥムに保存されている。カルヌントゥムはローマ帝政期に正規軍団が駐屯した要塞であり、今日ではそこに、要塞や門、円形闘技場の遺跡を見ることができるのである。一方、ウィーン市中では、観光客で賑やかな王宮を東に出たところのミヒャエル広場に、1990年代初めに見つかったローマ時代の市壁や居宅の暖房装置の跡があり（写真1）、またウィーン市の象徴、シュテンファン大聖堂の少し北側、ホーヘルマルクトにも要塞の遺跡があるが、いずれも規模は小さい。



写真1



写真2

しかし、ウィーン市としては、ハプスブルク帝国の帝都だけでなく、ローマ帝国との繋がりも大切にしたいかに見える。先述のホーヘルマルクトのローマ遺跡は、1948年、下水道工事の際に発見されたもので、要塞の中の将官の居宅部分に相当するが、建物の地階部分にあり、見学者に対応する設備もなく、劣化しつつあった。2007年にこの遺跡のある建物の1階部分で営業していたレストランが閉店するとの情報を得たウィーン博物館組織は、直ちに敷地の所有者と交渉して場所を借り上げ、地階の遺跡部分を見学しやすいように整備する

とともに、2階建ての地上部分を作って出土物を展示し、見学者に対する歴史教育的配慮が行き届いた博物館を作り上げた（写真2）。出来上がった博物館は、小規模ながら、開館すると見学者が大幅に増え、開館翌年の2008年1年間の来場者は3万人以上となったとのことである（博物館で販売のガイド M. Kronberger (hrsg.), *Vindobona*, Römermuseum/Wien, 2009 による）。私が訪ねた時（2013年9月）も、小学校高学年くらいの年齢の生徒たちのグループが、ローマ時代のウィーン市についての先生の説明に熱心に耳を傾けていた。

さて、現在のウィーンの地にローマ軍が到達したのは、2代皇帝ティベリウスの治世（14～37年）と考えられている。第15アポリナリス軍団がしばしこの地に駐屯したことが知られているのである。恒常的な軍団要塞が建設され始めたのは、紀元後1世紀の後半、ドミティアヌス帝の治世であった。これは、ドナウ沿岸フロンティアに対する同皇帝の積極政策の一環であった。しかし、ダキア人との戦争をはじめとして、ドミティアヌス帝の作戦は十分な成果をあげることができなかった。そして、その仕事は五賢帝2番目のトラヤヌスに委ねられることになり、トラヤヌス帝は106年までに、ダキアを征服しローマの属州とするという最も過激な措置をおこなって、長年の懸案を片付けたのである。この間、ウィンドボナは正規軍団の恒常的な駐屯地となり、とくに114年頃からは第10ゲミナ軍団が駐屯を開始して、ローマ支配の最後までこの地を基地とした。

ウィンドボナは2世紀の初めから、属州上部パンノニアに組み入れられた。この属州では、ウィンドボナの他に、先述のカルヌントゥム、さらにブリゲティオにも正規軍団が駐屯した。2世紀後半のマルクス・アウレリウス帝治世になると、166年頃からドナウ沿岸フロンティアはまた騒々しくなり、マルコマンニー族やクァディ族、ヤジUGEス族などとローマとの戦い、すなわちマルコマンニー戦争がマルクス帝の治世最後まで続いた。この戦争で、ウィンドボナはカルヌントゥムなどとともに皇帝軍の前線基地となった。さらには、193年になると、属州総督であったセプティミウス・セウェルスがカルヌントゥムに駐屯する軍団によって皇帝に推戴された。そして、内戦の後、ついに単独皇帝となった。このセウェル登位以後、235年まで継続したセウェルス朝皇帝たちの治世に、ウィンドボナ周辺の地域は大いに繁栄することとなり、ウィンドボナの民間人定住地もその広さが最大になったようである。

ローマ人が軍の要塞を築いたのは、現在シュテファン大聖堂がある場所のやや西方で、その広さは22.5ヘクタールほどであった。ホーヘルマルクトの博物館の地階で展示している遺跡は、軍団要塞内の将官の居宅の跡で、暖房装置が観察でき

る。この要塞の周辺に民間人定住地（カナバエ）ができていた。その広さは100ヘクタールほどとみられ、その広がりには現在のリンクで囲まれた部分にかなり近い。この民間人定住地には、最も多い時期で2万人の人々が住んだ。さらに、この要塞附属民間人定住地の南東に当たる地域に別の民間人定住地が作られていた。その広さは52ヘクタールほどで、最盛期に1万人の人々が暮らしていたようである。

3世紀の後半になると、ウィンドボナの町はフロンティアからの諸部族の侵入に悩まされ、要塞も民間人定住地も衰退し始めた。危機克服を目指したディオクレティアヌス帝によって、帝国の属州が再編され、ウィンドボナは新属州のパノニア・プリマに含まれることになったが、コンスタンティヌス1世帝の時には、民間人は要塞に引きこもるようになった。350年頃この地方を襲った地震でカルヌントゥムが被害を受けたことが知られるが、ウィンドボナも同様に影響を受けたであろうと推測されている。

4世紀の後半には、皇帝ワレンティニアヌス1世の活躍で、ドナウ沿岸フロンティアは軍備を固めたが、378年のアドリアノーブルにおけるローマ軍の敗北後、諸部族の移動は激しくなり、属州都市の衰退は激しく、4世紀の末から430年頃までの間にウィンドボナは軍事行政機能を失ったようである。430年以後、9世紀に至るまで、この地に人がまとまって定住した痕跡はなく、ローマ都市ウィンドボナの歴史は5世紀初めに終わったと見られる。

先述のホーヘルマルクトの博物館では、1階と2階に遺物を展示するとともに、ウィンドボナが辿った歴史を説明している。ただいまの私の説明もその抜き書きのようなものに過ぎない。小さな博物館であるが、軍団の存在に規定されるフロンティアの「軍隊社会」のありさまを実感できる点で、この博物館は有り難い。

ところで、ウィーン市内にはその地のローマ時代の遺跡・遺物等は多くは残されていないのであるが、ローマ帝国の史料・遺物としては、文化的価値の高いものが実にたくさん所蔵されている。有名な美術史美術館には皇帝たちの彫刻、カメオ、貨幣などおびただしい数の展示がある。王宮にあるエフェソス博物館には、現トルコのエフェソスからもって来た見応えある彫刻群があり、国立図書館内にはパピルス博物館があって、この国の誇る豊かなパピルスのコレクションの一端が展示されている。さらに、古代末期に作成された地図の13世紀の写本、ポイティンガー地図も、この国立図書館の所蔵である。ただ、Codex Vindobonensis 324として所蔵されるこの古地図写本を実見するのは難しい。私は国立図書館のKartensammlungへ赴いて頼んだが、見せてもらったのは1976年刊行のファクシミリ版と4冊の参考書だけであった。

さて、ウィーンに最もよく結びつけられるローマ人といえば、哲学者皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌス（在位 161～180 年）である。マルクス帝は先述したように、その治世の大半を北方の部族の侵入を撃退しフロンティアの安定を確保するための戦争に忙殺され、ついにその陣中で没した。180 年の 3 月 17 日のことであるが、その没した場所の候補地の一つに、このウィンドボナがあげられているからである（アウレリウス・ウィクトルの書）。上記のホーヘルマルクトの北西には、「マルクス・アウレリウス通」なる通りがあり（写真 3）、マルクス・アウレリウスの名前がついたビルもある。しかし、長くもないその通りを歩いても、とくにローマに関する遺跡があるわけではない。印象に残ったのは、この通りの 5 番地で、ナチ支配下の 1938 年から 1941 年までユダヤ人の子供たちのために学校を運営した教育者 Aron Menczer に捧げられた碑である。ドイツ語と英語で書かれたその碑には、彼が 1200 名のユダヤ人の孤児とともにアウシュビッツに送られて、26 歳の若さで 1943 年 10 月 7 日に殺害されたと刻まれている。



写真 3

ウィーンに来て一番ローマ帝国を感じるのは、ハプスブルク帝国が集めた膨大な彫刻や碑文などの遺物を観察する時だといってよいだろう。ローマ帝国の文化を理解すると同時に、それらを収集した近代の大帝国の権力と富を想わざるをえない。そして、もう一つ。ミネラル・ウォーターを飲む時。ウィーンで最もよく飲まれているミネラル・ウォーターは Vöslauer という銘柄の商品だが、それと同じくらい店頭に置かれているのが Römerquelle である。「ローマ人の泉」と訳せるこの商品、ラベルとキャップには、器で水を飲むローマ軍兵士の横顔が描かれている。ここでもローマ帝国が利用されていると想いながらも、私はウィーン滞在中、ずっとこの水を飲んでいた。